

院生・教員連絡協議会報告 —活動の拡充を目指して—

山本 彩純

(授業力高度化コース 8 期生)

1. 院生・教員連絡協議会について

院生・教員連絡協議会（以下、協議会とする。）は 2012 年に設立した。その趣旨と目的は院生と教員の率直かつ建設的な意見交換を通して、本研究科のカリキュラムや自習室など学修環境を改善し、教育と研究をよりよいものにすることにある。また、院生と教員が相互に主体的に本研究科での「学び」に参画するための協議の場とすることである。そのために、授業アンケート等を活用し、本年度は協議会を 5 回開催している。

協議会は、互選により選出された授業力高度化コース M1・M2 各 2 名、生徒指導力高度化コース M1・M2 各 2 名、学校経営力高度化コース M1 の 2 名、合計 10 名の院生委員と、研究科運営委員会の教員委員 9 名で構成されている。院生委員の主な仕事としては各コース、各回生からの意見を集約し、協議会での意見交換に臨み、その内容を持ち帰って周知することである。要するに院生委員は院生を代表し、教員と積極的なコミュニケーションをとることで、院生と教員をつなぐ役割を担っている。また、院生委員は年 2 回開催される院生・教員交流集会を、院生と教員の双方が充実したものになるよう企画し、運営をする。

2. 院生・教員交流集会

院生・教員交流集会の目的は、本研究科の学びの深化を目指すとともに院生と教員のコミュニケーションを深めることにある。即ち、院生にとっては院生同士の交流を深める場であり、教員にとってはカリキュラム改善に向けて、院生の実態を把握する場として成立している。今では毎回 100 名を超える参加があり、大規模なものになっていることから、院生・教員交流集会は公式行事に附随した位置づけになりつつある。

本年度の第 1 回院生・教員交流集会の議題は「理論と実践の往還を目指すとは」である。これは院生と教員が本研究科の設置目的をどのように捉えて院での学びを広げているのかを考え、交流するきっかけになってほしいというねらいで設定した。はじめに M1・M2、現職院生の混同でグループをつくり、教員は自由に話し合いに参加していただく形式をとった。その後、4 グループ合同で意見交流を行った。グループ協議では、本研究科のカリキュラムの在り方を捉えなおそうとしている班もあり、院での学びを再確認することができたという声が多数あった。一方で、議題が抽象的だったので、方向性が定まらなかったや話の流れがまとまらなかったと

いう意見も挙げた。

第2回院生・教員交流集会の議題は第1回よりも具体的に、「授業づくりで大切にしたいことは」と設定した。次期学習指導要領の方針等も絡めて、深い議論ができるのではないかといいねらいで設定をした。また、初めての試みとして、事前にアンケートで希望を調査し、教科や校種（小学校、特別活動、数学、国語、英語、社会、理科、情報、道徳、特別支援）ごとにグループ協議し、その後、3グループ合同で意見交流を行った。話し合いが実践的な内容であったため、現場に出ても考え続けたいや教科が異なっても共通する点を考えることができたという声が挙げた。

院生・教員交流集会は実践ですぐに役立つ方法や個々で抱えている悩みを現職院生や教員に相談する場ではないと考えている。学部卒院生、現職院生と教員が本研究科でどのようなことを考え、学びを深めているのかをそれぞれが捉えなおし、新たな視点を得る場であり、かつ院生個々での交流が活発になるきっかけの場として、今後もより充実した院生・教員交流集会になるように研鑽を続けていきたい。

3. ミニ交流集会

ミニ交流集会は院生・教員交流集会をより気軽に参加できるようにしたものである。本年度は学部新卒院生のM1・M2、現職院生、教員という縦の交流を活性化することを目的に3回開催した。開催数を増やしたためか、毎回20名から30名ほどの参加者が集まった。

第1回ミニ交流集会はM2の院生委員主催で「SNS」「LGBT」「部活動」「道徳」という現代的教育課題で4つの班をつくり、ワールドカフェ方式で意見交流を図った。本年度はじめてのミニ交流集会だったためか参加者は少ない印象だったが、議題のそれぞれに関心がある院生が集まり、普段の生活ではあまり話さない内容の議論を深めるきっかけになった。

第2回ミニ交流集会は学校経営力高度化コースの院生委員が催した。京都市立小中一貫校の研究発表会に参加し、後日に意見交流会を行う形式をとった。多くの現職院生が参加して、意見交流会をすることは学部新卒院生にとってもあまり経験できない貴重な機会になったと思う。

第3回ミニ交流集会はM1の院生委員主催で行い、「教材研究の方法」「なぜ生きなければいけないの？と子どもに聞かれたら」「なぜ教職大学院に入学したのか」の議題で協議した。この議題は事前にM1アンケートで集めたものから選定したため、前の2回に比べ、特にM1が積極的に参加していた。また、第3回目ということもあり、参加者自体も一番多い回となった。

これらのことから、ミニ交流集会の目的を達成するには開催数の頻度を増やし、定期的な交流の場を設けることが有効だと考える。加えて、より多くの院生に関心を抱いてもらえるように主催者をM1・M2・現職院生それぞれが分担して行い、本研究科全体の要望をくみ取ることでもある。最後に、ミニ交流集会を院生委員だけが主催するのではなく、「このような議題で交流してみたい」という思いのある院生が自主的に参加者を募るような、院生委員以外からの発端で開催できるようにすることも今後の広がりとして考えていくべきだと思う。

4. 日本教職大学院協会研究大会への参加

日本教職大学院協会研究大会は毎年 12 月に東京で行われている。そこでは各教職大学院の特色あるカリキュラムについて発表があったり、ポスターセッションでは院生同士の意見交流が行われたりしていた。本年度は「教職大学院の特色あるカリキュラム ―修了生の質保証を視野に入れて―」という題のパネルディスカッションに浅井和行研究科長がパネリストとして登壇されていた。また、ポスターセッションでは学校経営力高度化コース 8 期生の大崎直子さんが「学校づくりにおける『協働』の実践と省察」という発表をされた。研究大会に参加した経験は本研究科の特色を他の教職大学院と比較し、考える契機になった。

5. 本年度の活動

前年度からの引継ぎにより「協議会活動の拡充」を本年度の活動の大きな目標とした。この目標に至った理由としては協議会で行っている活動が現在、院生委員が主体で進めており、本研究科全体を巻き込んで取り組んでいくことに課題を感じる状態だったことにある。これからは院生全体が協議会活動に携わっていることを自覚し、積極的に参画してほしいという思いから、「活動の透明化」「図書の実践」「教職専門実習Ⅱに関するアンケート調査」の 3 つを重点的に進めていった。

(1) 活動の透明化

協議会活動を本研究科全体に広めていくために、「院生・教員連絡協議会通信」を発行していた。前年度は年に 3 回発行していたものを、本年度は 10 回に発行頻度を増やした。通信の内容は協議会で話し合ったこと、院生・教員交流集会のまとめやミニ交流集会のお知らせなど院生全体に共有したいことを発信し続けていた。また、より周知が徹底できるように、メールで院生への一斉連絡に加えて、連合事務室前と各コースの自習室に掲示を行った。

これにより、院生委員が行っている活動や協議会でどのようなことを話し合っているのかを多くの院生に広め、本研究科の実態や課題をそれぞれが考え、参画に向けての一助となったのではないかと考えている。

(2) 図書の充実

各コースの自習室にある図書に関しては、例年、紛失したり、登録外の場所へ移動したりしている現状があり、年度末には院生委員が主導して膨大な量の図書を整理し直さなくてはならなかった。そこで本年度より、連合事務室の方のご協力を得て、図書 1 冊ごとに登録場所のラベルを貼っていただいた。よって、図書の登録場所が簡潔にわかるようになり、自習室間の移動が激減した。また、図書の貸出制度をすべての自習室で統一し、長期的に貸し出している図書があれば、声掛けを行うようにした。

このように図書の管理体制を整えたことによって、授業力高度化コース M1 の自習室に新しい小学校・中学校の教科書を購入していただいた。自習室に教科書が配架されたことで、休日

や夜遅くでも教材研究や教科書比較に励みやすい充実した学修環境になった。

(3) 教職専門実習Ⅱに関するアンケート調査

前年度までは教職専門実習Ⅰを終えた M1 の時期しか、教職専門実習に関するアンケートは実施されていなかった。そこで、教職専門実習Ⅱを終えた M2 対象に実態や意識を M2 の院生委員で調査をした。その契機は教職専門実習Ⅰと教職専門実習Ⅱを終えて、実習校でどのような経験をさせていただけたのか、修了論文に向けて有意義な実践をさせていただくにはどのような意識で向かったかなど、今後の教職専門実習の在り方をより良くしたいという思いからである。

実施したアンケートの結果は協議会で共有し、教職専門実習の意義を再度、研究科全体で確認することができたと考えている。このような調査は 1 回だけで終わるのではなく、今後も続けて教職専門実習における省察に活用していただきたい。

6. 来年度の活動に向けて

来年度以降の協議会活動に関しては、2 点ある。

1 点目としては本年度行った「活動の透明化」を継続してもらいたいと思う。まだまだ協議会の活動は院生全体に対して、不明瞭で知らないところで活動している印象が拭えていない。積極的な参画を院生全体に求めるならば、情報の公開を絶えず行い、多くの院生に周知してもらえる環境を作り出してほしい。

2 点目は本研究科をより良くするために考えることを続けてほしいと思う。「図書の実」や「教職専門実習Ⅱに関するアンケート調査」のように本研究科の学修環境の改善は、一人ひとりが考え続けることで見つけ出され、改善される。同様に、院生・教員交流集会等の方法も今まで行っていないやり方が目的を達成する可能性もある。常にとは言わないが、頭の片隅に目的や意味を留め、研鑽し続けていくことを、来年度の活動に期待している。